

## テレビの暴力映像が子どもの脱感作に 及ぼす影響：小学生と中学生の 縦断研究からの検討

長谷川真里\*・鈴木佳苗\*\*・  
佐渡真紀子\*\*\*・堀内由樹子\*\*\*・  
坂元 章\*\*\*

### Longitudinal Study with Elementary and Junior High School Students on the Effects of Violent Television Images on Children's Desensitization

Mari HASEGAWA\*, Kanae SUZUKI\*\*,  
Makiko SADO\*\*\*, Yukiko HORIUCHI\*\*\*,  
and Akira SAKAMOTO\*\*\*

A panel survey consisting of two waves was conducted with elementary and junior high school students. The results indicated the following: (1) time of watching television itself did not affect children's desensitization. (2) Desensitization in junior high school students was promoted through violent pictures, more than in the case of elementary school students. (3) The context of violent actions affected the influence of desensitization.

**key words:** media violence, desensitization, panel study

#### はじめに

暴力的な映像の接触が青少年犯罪の原因の一つにあげられるなど、メディアの悪影響についての議論がある。これまで、暴力映像と攻撃性に関する研究から、おおむね攻撃促進効果があるとする答えが有力になる一方で、単なる視聴時間ではなく、どのような映像に接触するのかなどの文脈要因が重要であることもわかってきた(湯川, 2003)。たとえば、同じ攻撃行動でも、その後で被害者の苦痛が強調される場合その行動の否定的な意味が強くなる。家庭で最も親しまれているメディアはテレビである。また、日本のテレビ番組の約7割に暴力描写が含まれており(佐渡・鈴木・坂元, 2005)、青少年はテレビで放映される暴力描写にさらされていると考えられる。暴力映像の影響に関する理論の一つに脱感作理論(desensitization theory)がある(レビューとして Brockmyer, 2013)。これは、暴力映像に反復的に接触することによって暴力に対する通常の情動的な反応性が低下するというものである。この脱感作により、暴力への無感覚な態度が攻撃行動の抑制を弱めると考えられる。日常的にも「暴力映像を見すぎると感覚がマヒして

しまう」と言われることもあるが、本当に「麻痺」してしまうのだろうか。またそれは、どのような映像のときに生じるのだろうか。しかしながら、テレビ視聴が青少年の脱感作に及ぼす影響について、縦断的調査による影響関係の検討は不足している。そこで、本研究は、いじめや非行などの問題が顕著になる小学校高学年～中学生にかけての子どもを対象に、メディア接触が脱感作に与える影響を検討する。なお、相関関係ではなく因果関係を明らかにするために、本研究は2波のパネル調査を実施する。

#### 方 法

**調査対象者** 全国さまざまな地域の6つの小学校の児童462名(男239, 女223)、6つの中学校の生徒790名(男387, 女407)が2回の調査に参加した。1回目調査時の小学生は5年生、中学生は1年生、2回目調査時の小学生は6年生、中学生は2年生であった。

**質問項目** 本調査には他の研究目的のために実施された質問項目も含まれるが、本研究の分析の対象となるのは、次の8つである。(1)平日および休日の1日あたりのテレビ視聴時間:1日あたり何時間何分程度視聴しているかを尋ねた。(2)暴力描写の視聴の程度:10種類の暴力(Table 1)に対し、「まったく見なかった(1)」～「とてもよく見た(4)」の4件法で回答を求めた。対象となった暴力は、「身体的暴力」8種類、「言語的暴力」1種類、「間接的暴力」1種類である。(3)暴力描写の選好の程度:(2)と同じ10種類の暴力(Table 1)に対し、「ひじょうにきらい(1)」～「ひじょうに好き(5)」の5件法で回答を求めた。(4)暴力描写に伴う報酬と罰の視聴の程度:5つの罰または報酬の描写(Table 1)に対し「とても少なかった(1)」～「とても多かった(4)」の4件法で回答を求めた。報酬と罰の説明は子どもにも理解可能なように例が示された。たとえば「暴力行為者への罰」は、暴力をふるった人が悲しんだり、自分をせめたりした、他の人から叱られたり、悪く言われたりした、警察につかまった、周りの人から暴力をうけた、などである。(5)脱感作:「テレビで、殴る・ナイフで刺す・銃で撃つなどのシーンを見たとき、あなたのような気持ちになりますか」という質問に対し複数の感情(たとえば「わくわくする」「こわい」など)とともに「別になんとも感じない」を提示し、「まったくそう感じない(1)」～「いつもそう感じる(5)」の5件法で回答を求めた。得点が高いほど脱感作の程度が高いと想定した。自己報告方式は生理的反応などの無意識的反応を捉えられない限界があるが、多人数のパネル調査による結果の安定性を得られるという利点もある。(6)社会的望ましき:桜井(1984)の児童用社会的望ましき尺度を使用した(25項目に対し「はい(1)」、「いいえ(2)」の2件法で回答)。なお、(2)～(4)の項目は、佐渡ら(2005)の内容分析研究で使用された分析項目と対応しており、日本のテレビ番組において代表的な描写である。また、(5)脱感作と(6)社会的望ましきは2回の調査において同じ項目と尺度を用いたが、(1)～(4)のメディア変数は調査協力校の都合により、2回目調査において変更された項目内容がある(ただし本稿の分析にはかわらない項目であるので、記載は省略する)。また、調査では、暴力行為を行うキャラクターの特徴の視聴の程度と暴力行為の理由の視聴の程度も質問したが、有意な関係がみられなかったため、紙幅の関係で報告を省く。

**手続き** 1回目は2004年、2回目は2005年、それぞれ2学期の終わりから3学期にかけて学校の都合に合わせて実施した。調査は担任教師により教室単位で行われた。所要時間は約45分であった。

**分析モデル** 2回目調査の脱感作を従属変数、性別、1

\* 横浜市立大学

Yokohama City University, 22-2 Seto, Kanazawa-ku, Yokohama, Kanagawa 236-0027, Japan  
e-mail: marihase@yokohama-cu.ac.jp

\*\* 筑波大学

University of Tsukuba, 1-2 Kasuga, Tsukuba, Ibaraki 305-8550, Japan

\*\*\* お茶の水女子大学

Ochanomizu University, 2-1-1 Ohtsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610, Japan

Table 1 メディア変数の平均得点と重回帰分析の結果

メディア変数	標準偏回帰係数		平均点 (SD)			
	小学生	中学生	小学生	中学生	小学生	中学生
<b>テレビ視聴</b>						
平日の平均視聴時間(分)	-.01	.02	d	162.00 (146.48)	148.10 (98.57)	
休日の平均視聴時間(分)	.00	a	.02	d	220.00 (184.39)	246.42 (168.13)
<b>暴力行為描写の視聴</b>						
<b>&lt;身体的暴力&gt;</b>						
手足を使って殴ったり蹴ったりするシーン	.02	b	.04	d	2.45 (1.01)	2.37 (.93)
ナイフで刺したり銃で撃ったりするシーン	.01	b	.04	d	2.08 (1.00)	1.89 (.88)
身近なもの(ロープ, 棒, 火や水)を使って攻撃をするシーン	-.02	b	.15***	f	2.00 (.99)	1.86 (.92)
暴力を受けた人が苦しんだり痛がったりしているシーン(逆転項目)	-.01	b	-.08*	d	2.83 (1.00)	2.98 (.89)
血や死体が出てくるシーン	.05	b	.09*	e	2.20 (1.08)	2.04 (.95)
冗談を言ったり笑ったりしながら暴力をふるうシーン	-.03	b	.08*	e	1.95 (.96)	1.87 (.93)
数え切れないほどの暴力が続くシーン	.02	b	.03	e	1.82 (1.02)	1.57 (.87)
<b>&lt;言語的暴力&gt;</b>						
ことばでひどいことを言うシーン	-.06	b	.02	d	2.19 (.89)	2.23 (.85)
<b>&lt;間接的暴力&gt;</b>						
物をかくしたり, 悪いうわさを流したりしていじわるをするシーン	.07	b	.04	d	1.84 (.89)	1.65 (.84)
<b>暴力行為描写の嗜好</b>						
<b>&lt;身体的暴力&gt;</b>						
手足を使って殴ったり蹴ったりするシーン	.12*	c	.09*	d	2.25 (1.24)	2.50 (1.05)
ナイフで刺したり銃で撃ったりするシーン	.08	b	.13**	d	1.86 (1.15)	2.18 (1.15)
身近なもの(ロープ, 棒, 火や水)を使って攻撃をするシーン	.09	b	.16***	g	2.18 (1.22)	2.37 (1.05)
暴力を受けた人が苦しんだり痛がったりしているシーン(逆転項目)	-.03	b	-.17***	g	4.16 (1.02)	4.01 (.97)
血や死体が出てくるシーン	.10	b	.15***	f	1.77 (1.12)	2.02 (1.09)
冗談を言ったり笑ったりしながら暴力をふるうシーン	.07	a	.12**	e	2.05 (1.14)	2.28 (1.06)
数え切れないほどの暴力が続くシーン	.10	b	.09*	e	1.83 (1.13)	1.92 (1.08)
<b>&lt;言語的暴力&gt;</b>						
ことばでひどいことを言うシーン	.08	b	.10*	d	2.23 (1.00)	2.48 (.91)
<b>&lt;間接的暴力&gt;</b>						
物をかくしたり, 悪いうわさを流したりしていじわるをするシーン	.06	b	.13**	f	1.85 (1.00)	1.99 (.97)
<b>報酬と罰などの視聴</b>						
暴力行為者への報酬	.04	b	.10*	e	1.79 (.84)	1.85 (.82)
暴力行為者への罰	-.03	b	-.04	e	2.76 (.98)	2.79 (.92)
暴力行為者への連続罰	-.03	b	-.07*	e	2.26 (.97)	2.22 (.89)
被害者の家族・友人の悲しみ	.02	b	-.12**	e	2.40 (1.09)	2.30 (1.00)
被害者への長期的被害	.04	b	-.02	d	2.18 (1.07)	2.06 (.93)

註1) \* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$

註2) 決定係数(説明率 R<sup>2</sup>; a=.04\*\*, b=.05\*\*\*, c=.06\*\*\*, d=.09\*\*\*, e=.10\*\*\*, f=.11\*\*\*, g=.12\*\*\*)

Table 2 脱感作と社会的望ましさの平均得点 (SD)

	小学生		中学生	
	1回目調査	2回目調査	1回目調査	2回目調査
脱感作	2.16 (1.30)	2.34 (1.34)	2.56 (1.26)	2.64 (1.30)
社会的望ましさ	39.38 (5.18)	38.74 (4.86)	37.72 (4.40)	37.45 (4.22)

今回調査のメディア変数(1)~(4), 脱感作, 社会的望ましさを独立変数とした分析モデルによる重回帰分析を行った(強制投入法)。このような分析方法を用いて, 性別,

社会的望ましさ, 対応変数(本研究では1回目調査の脱感作)の影響を除去し, メディア変数が脱感作に与える影響を検討することが可能になる。なお, 紙幅の関係で, 男女ごとの分析は省略する。

## 結果と考察

テレビ視聴時間, 暴力行為描写の視聴, 暴力行為描写の嗜好, 報酬と罰の平均得点とSDはTable 1, 脱感作と社会的望ましさの平均得点とSDはTable 2に示す。

Table 1に示されるように, 小学生, 中学生ともにテレビの視聴時間と脱感作に関連はなかった。小学生については, 「手足を使って殴ったり蹴ったりするシーン」の嗜好が脱感作を高めた。中学生においては, 「身近なものを使って攻撃をするシーン」「血や死体が出てくるシーン」「冗談を言ったり笑ったりしながら暴力をふるうシーン」の視聴, 逆転項目を除く身体的暴力, 言語的暴力, 間接的暴力すべての嗜好が脱感作を高めた。また, 「暴力行為者への報酬」が脱感作を高めた。一方, 「暴力を受けた人が苦しんだり痛がったりしているシーン」の視聴, 「暴力を受けた人が苦しんだり痛がったりしているシーン」の嗜好, 「暴力行為者への連続罰」「被害者の家族・友人の悲しみ」が脱感作を低めた。このように, 暴力シーンの視聴と嗜好が脱感作と関連するものの, すべてのシーンが同じように影響するわけではないことが示唆された。暴力後に被害者が苦しむシーン, 被害者の家族や友人が悲しむシーンの描写は脱感作を低める可能性が示唆された。また脱感作への影響は, 小学生と中学生で異なった。全体的には, 中学生のほうが, 暴力シーンの接触により脱感作が生じた。これは, 本研究の小学生より中学生のテレビ視聴時間が長い(Table 1参照)ことによって, 相対的に暴力映像の接触時間が長いために生じるのか, 自分の感情状態を把握するために必要なメタ認知能力の発達に影響されていることなのか, 本研究から結論づけることはできない。

以上の結果から, 本研究において示唆されることは次の3つである。第1に, テレビの視聴時間自体は, 脱感作に影響をおよぼさなかった。第2に, 暴力映像への接触による脱感作の促進は, 小学生よりも中学生のほうが強いことが示唆された。第3に, 行為の描かれる文脈が脱感作に影響した。たとえば, 行為後の罰や周りの人たちの悲しみの描写によって, 脱感作が抑制されることが示唆された。

本研究は, 青少年の認知する暴力映像を対象としており, 実際にどの程度接触しているかは明らかではない。同様に, 脱感作を測定するための項目も自己報告式であった。このようないくつかの限界があるものの, 本研究は, 「暴力にさらされて麻痺してしまう」という日常的にもよく見られる現象の解明のための資料を提供するという意義がある。

## 引用文献

- Brockmyer, J. F. 2013 Media violence, desensitization, and psychological engagement. In K. E. Dill (Ed.), *The Oxford handbook of media psychology*. New York: Oxford University Press Inc., pp. 212-222.
- 佐渡真紀子・鈴木佳苗・坂元 章 2005 テレビ番組における暴力および向社会的行為描写の分析 日本教育工学会論文誌, 28, 77-80.
- 桜井茂男 1984 児童用社会的望ましさ測定尺度(SDSC)の作成 教育心理学研究, 32, 310-314.
- 湯川進太郎 2003 テレビと暴力 坂元 章(編)メディアと人間の発達 学文社 pp. 41-57.

(受稿: 2013.5.18; 受理: 2013.9.27)